らの可能性に気づかせてくれる大人の存在が不可欠です。その子を理解してくれる大人がたくさんいることが家族に頼らずに自分で生きていける、ひとつの足場になると思っています。

～指定討論会より～ ➢➢➢➢➢➢➢➢➢➢➢➢➢➢➢➢➢➢➢➢➢➢➢➢➢➢➢➢➢➢➢➢

シンポジウムの後、パネリストと指定討論者の方々から『子どもの育つ場』について熱い討論がなされました。
紙面の都合上、全てを掲載できませんが、要約すると以下のようになります。

一般の人たちは社会的養護下にある子どもたちに対して、過酷な生活環境から抜けられて良かったという気持ちがあるが、実は以下のような４つの苦悩がある。

① 本来なら慈しみ育てられる人（親など）から受けた痛みは簡単には癒されない

② 住みなれた環境を離れる

③ 全ての子どもたちが痛手を負い自分に焦点を当てて欲しいと思っている場に適応しなくてはならない

④ 本来ならモデルとすべき大人が家族には存在するが、施設には存在せず、この問題が思春期の課題と重なり、非常に不安定になりやすい

しかし、児童福祉分野では当事者の声が政策に反映される機会は少ない。少しでもそういった機会を増やすべきではないか。

子どもの精神的な問題の解決には、狭義の治癒に加えて人間としての養育、教育がなされてこそ目的を達成する。虐待を受けるとその傷は一生癒えないというフレーズがあるが、人は受けた傷を抱えて生きて行ける存在になれる。そのためには成熟した市民社会が必要であり、本当の育ちの場は、生まれたからには自分を認めてくれる世の中があるという感覚があってこそ成り立つこと。そのような市民社会の実現は大変に難しいかもしれない。しかし、今の子どもたちが１０年前の子どもたちより薄れている“人の心の繋がり”をより強く感じ、“大人になったら家族を大切にしたい”という思いを持つことが飛躍的に増えているという調査結果もある。これは人間は絶えず矛盾や課題の中で自分ができることをしようとする力を持っていることを示してはいないだろうか。我々専門家も市井の民として、子どもたちに教えてもらった“人の心の中に潜む可能性”を引き出すこと、そして、あらゆる人が地域社会に力を提供し、子どもたちの“普通の育ち”が支えられるようになることが一番良いのではないか。